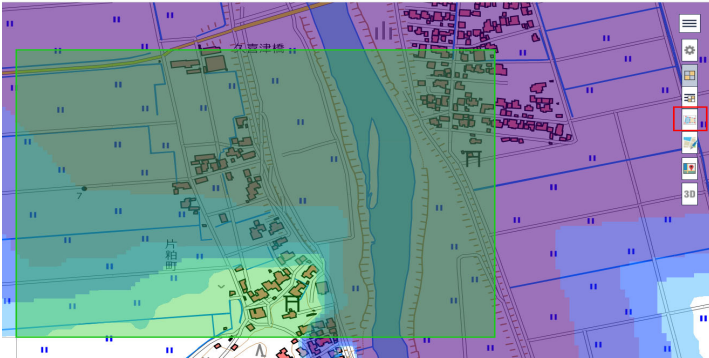
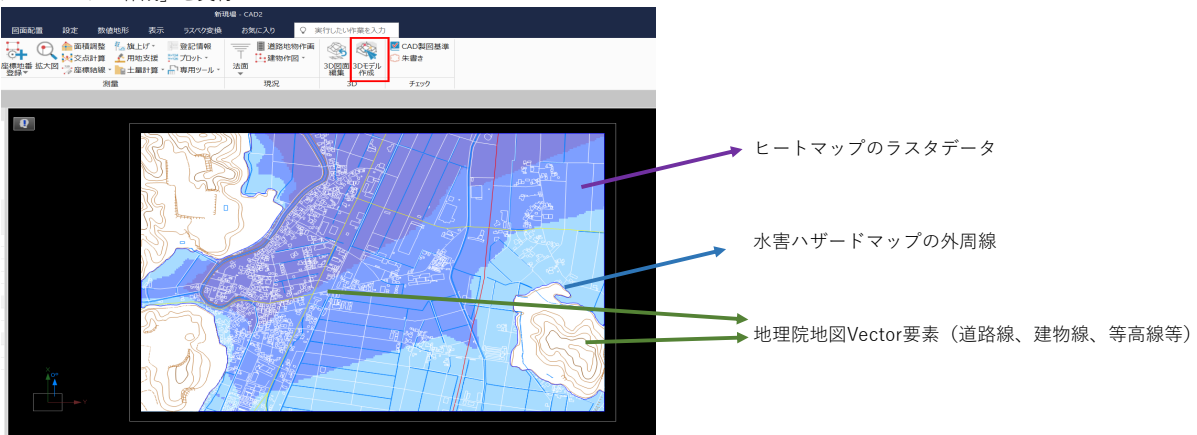


◆水害ハザードマップ-3Dモデル活用-浸水量算出 (TREND-ONE⇒TREND-POINT)

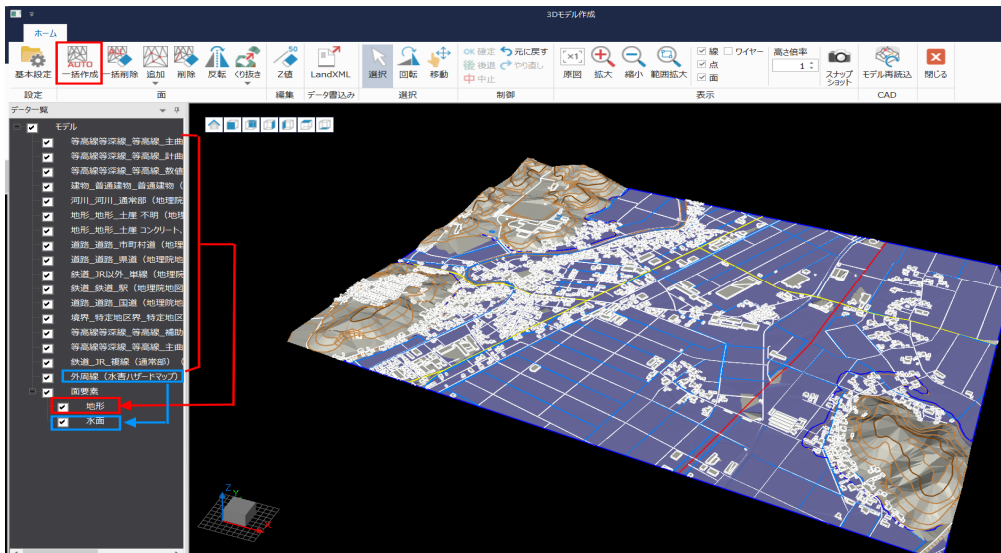
①メインの現場プロットから、地理院地図Vectorと水害ハザードマップを表示した状態で「簡易CAD配置」を実行



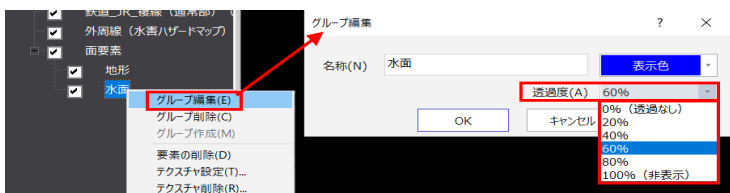
②指定範囲の地理院地図Vector要素と水害ハザードマップの外周線、ヒートマップのラスタがCADに配置されるこの状態で「3Dモデル作成」を実行



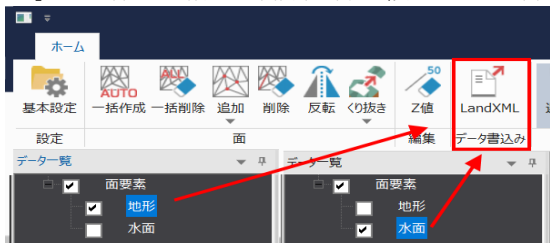
③面の「一括作成」コマンド等を用いて、地理院地図Vectorの要素、水害ハザードマップの外周線からそれぞれ面を作成



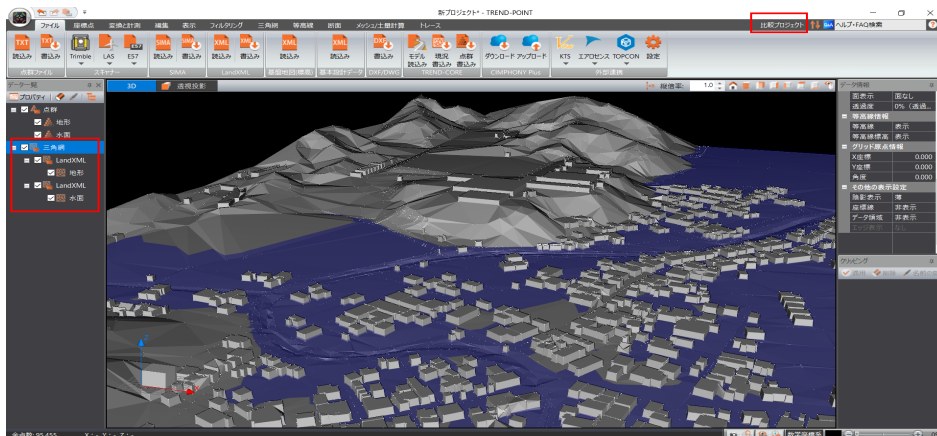
※Ver.5より、面要素に関して透過度が設定可能となったため、水面を透過させて下の地形を見せることも可能



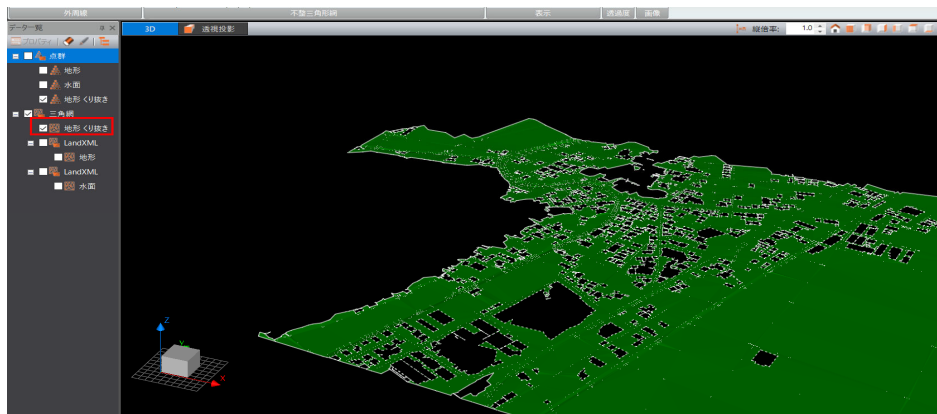
④「LandXML」データ書き込みで作成した面要素を出力（表示されている面が出力されるため、地形と水面で表示を切り替えてそれぞれ出力する）



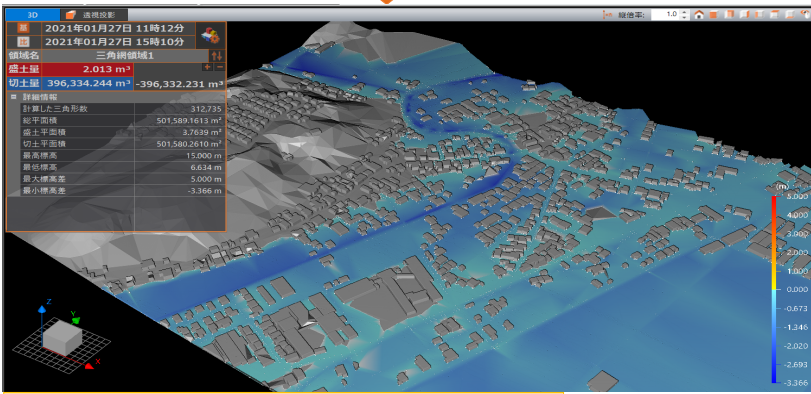
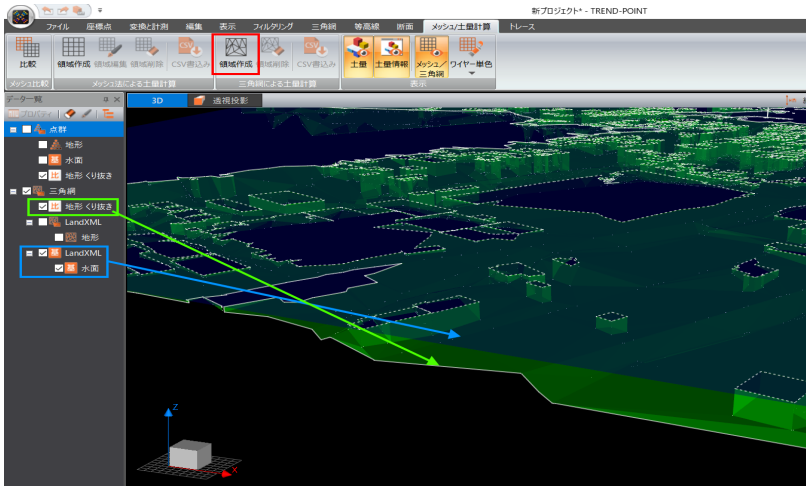
⑤TREND-POINTで「比較プロジェクト」を新規に作成し、地形面と水面のLandXMLデータをそれぞれ読み込む



⑥三角網の「くり抜き」機能を用いて、水面より下にある地形面を取り出す



⑦水面を「基準」、地形くり抜き面を「比較」に設定し、三角網による土量計算を実行（領域が広いと処理時間が長くなるため注意）



- ・切土量を浸水量と読み替えて概算の浸水量を把握
- ・盛土量がわずかにあるが、
浸水範囲境界部で座標の丸め誤差などが影響したと考えられる